

小学校の理科における授業実践

明治大学から小学校教員への道

滝沢正規（国立学園小学校）

※この分科会を設けるにあたって

明治大学教育会の発足以来、6回目の総会・研究大会を終えるまでになった。言及するまでもないが、明治大学の教職課程で学ぶ学生たちは、中学校・高校の教員免許を取得しようとする学生が圧倒的多数である。しかし、明治大学では小学校の教員免許を取得することはかなり難しいにも拘わらず、教職課程で履修する学生の一部には、小学校教員を目指している、或いは小学校教員を選択肢の一つとして考えている学生がいて、それらの学生のために今回の研究大会で小学校教員に関する分科会を開催することになった。

また、この稿の「I. 明治大学から小学校教員への道」については、2011年度の研究紀要に既に掲載されているが、新たに小学校教員を視野に入れている学生諸君の参考にして欲しいとの思いから、敢えて載せることにした。

分科会の発表から

I 明治大学から小学校教員への道

(1) どのような選択肢があるか

① 明治大学の教職課程で卒業と同時に取得できる教員免許は、中学・高校の教員免許のみである。従って、明治大学を卒業して教員になる者の多くは中学・高校の教員である。しかし、明治大学を卒業した後に、即、本採用の小学校教員になることは不可能ではない。勿論、臨時採用や講師採用であれば、本人が希望して教育委員会との間で採用条件が合致すれば、卒業と同時に小学校の臨時教員になれる可能性はある。

ごく稀ではあるが、明治大学卒業と同時に本採用の小学校教員になれることもある。そのためには、文部科学省の小学校教員資格認定試験に合格することが必要である。実際に、小学校教員資格認定試験に合格して、2012年度4月から滋賀県の小学校に採用された者がいた。但し、この小学校教員資格認定試験に合格するのは、かなりハードルが高い。具体的には、大学の教職課程で履修している学生が、更に小学校教員養成課程に関する幾つもの科目試験に合格しなければならない。そして、小学校教員資格認定試験に合格すると、大学在学中に小学校教員2種免許取得見込みとなり、大学4年生で小学校教員採用試験を受験できる。そして、卒業と同時に正採用の小学校教員への道が開ける。また、都道府県・政令指定都市によっては、中学・高校の教員採用試験の際に、小学校での臨時教員への希望の有無を尋ねることもあるので、教員採用試験を受ける際にはその確認が重要である。

② 小学校教員資格認定試験を受けるよりも、やや遠回りの道ではあるが、明治大学の

教職課程で中学・高校の教員免許を取得して卒業した後に、小学校教員養成課程のある大学に再入学・編入するとか、或いは、小学校教員養成の通信教育課程を持つ大学の通信教育で小学校教員免許を取得するのも一つの方法である。滝沢の場合がこれに当たる。

③ この他に、私立小学校で採用される場合がある。それは、小学校教員免許がなくても、中学・高校の音楽や図工・体育等の教員免許があれば、学級担任をせずに専科教員として小学校教員として若干名の採用がある。明治大学の場合で考えてみると、例えば中学・高校の英語の免許があれば、小学校の英語専科教員として採用される可能性がある。私立小学校の場合には、個々の学校で採用・面接を行うので、直接に当該小学校に問い合わせるのが一番であろう。

④ 一方では、最近の大都市圏での団塊世代の教員の大量退職に伴い、小学校教員の大量採用をする地域や都県があり、小学校教員への門戸は比較的広いとも言える。小学校教員が不足しがちな地域や都県では、中学・高校の教員採用試験に合格しながら採用に至らなかった成績優秀者に対して、小学校での勤務の希望を問うことがある。この場合は、募集要項に小学校での勤務の希望の有無を尋ねることがありますと明記されていることもあるので、希望があればその意思を明確に伝えることである。反対に、人口の増えない地域や減少する県では、小学校教員への門戸は狭いと言わざるを得ない。但し、これはあくまでも一般論であるので、個々の学生が教員採用試験を受験する際には、それぞれの都道府県・政令指定都市の教員採用の要項・実情をよく調べておくことが重要であろう。

(2) 明治大学から小学校教員になった滝沢の事例

①明治大学法学部法律学科を卒業するまでに、学部の単位を138取得した。

②明治大学教職課程で31単位を取り、中学・高校の社会科の教員免許を取得した。

③法学部法律学科で取得した138単位のうち、教職に振替えることができる単位は0。

但し、文学部等では、学部の単位を以って教職に振替えることができる単位が若干あるので、負担はやや軽減される。

④滝沢の場合は、明治大学法学部4年の夏に、出身である新潟県で中学校社会科の教員採用試験を受けて合格したが、採用には至らなかった。しかし、小学校での勤務はどうかという照会があり、受諾して臨時教員での採用になった。その後、玉川大学通信教育で31単位を取り、小学校教員2種免許を取得して正式採用になった。更に、東京都の私立小学校に転職後、文部科学省が公立学校教員に対して上級教員免許の取得を奨励する方針が打ち出された。そして、東京都教育委員会に経験年数を申告して、通信教育で取得した小学校2種免許を1種免許に更新して今日に至っている。

(3) 教員養成学部で小学校教員免許を取得する場合と、明治大学との違い

①国公立・私立の教員養成学部では、教育原理・教育心理・教育実習等を含めて通常

130～140 単位を取ると、卒業と同時に小学校教員 1 級免許を取得できる。

②明治大学から小学校教員になる場合には、学部を卒業するのに必要な単位数が約 130、中学・高校の教員免許取得に必要な単位数が約 40～50、小学校教員級免許を取得するのに必要な単位数が約 30～40 であるから、合計で 200 を超える単位が必要となってくる。

③つまり、明治大学から小学校の教員を目指す場合は、国公立・私立の教員養成学部で小学校教員免許を取得して教員になるよりも、単位数の面でかなりハードルが高いと言える。換言すれば、単位数が多い分だけ、教科の専門性が深まり、学校で授業や様々な活動を通して生徒と接する際に、その教科の専門性が大きな財産となるであろう。

II 小学校の授業を構成するにあたっての留意点

(1) わかったことや気づいたことを、まわりの友だちと相談したり確認したりする時間をとる。

児童が自分の考えや答えを、発表・検討する場面だけでなく、授業の導入や問題解決の途中で、友だちに相談したり意見交換したりすることができる場を、所々に設定していくことで、児童は自分の考えを深めたり、教師の問いに対する答えに自信を持ったりできるので、児童の集まりが学習集団へと発展していくことになる。

(2) 一人だけに発表させないで、続きを他の児童に発表させる。

児童の発表を、そのまま即、正解として受け止めるのではなく、例え完璧な発表であっても、敢えて教師が、「今の A 君の発表で、みんなは分かったかな？」と、他の児童に投げかけたり、「今の A 君の発表に付け足すことは、もうないかな？」と確認したりするようにすることが大切である。ともすると、児童は、教師に対してだけ理解してもらえればよいと考えがちで、学級集団の全員に伝える・理解してもらおう視点が不足していることが多い。教師と児童の 1 対 1 の関係でなく、児童 1 人対学級集団の関係が常に成立するように心がけることが必要である。

(3) 教師がわざと反対のことを言ったり、間違えたりすることで、児童の意識を喚起する。

小学校で児童と生活を共にしていると、担任をしている児童だけでなく、他の学級や学年の児童と接する機会も多くある。例えば、校庭にいて低学年の児童から「先生、この虫は何て言うの？」と聞かれることがある。児童の何気ない疑問に即座に答えることも可能な時もあるが、寧ろわからない場合のことが多い。そんな時に、自信たっぷりに「これはねえ、ゴジラの幼虫なんだよ！」と答えてみせる。すると、尋ねた児童は、「違うよ先生、そんなんじゃないよ！」と強く反論するものである。

「じゃ、一緒に図書室へ行って調べてみようか？」と、児童を誘って図書室へ行き、「調べる」という学習へ、児童が無意識のうちに誘導することができる。

また、理科の授業で実験をする前に、児童に結果を予想させる場合がある。そんな時に、教師がわざと有り得ない結果を予想して、児童に別の結果を予想させたり、反論させたりして、学級集団を無意識のうちに実験に集中させることになる。

(4) 過不足や空欄のある問題・課題を提示する。

算数の学習ではよく使われる手法であり、また効果的である。問題の途中や計算式の中に□を入れることにより、いろいろな場合、条件、答えを想定できるようになる。児童の中には、単純な計算問題を解くことはできるが、文章問題や応用問題になると苦手だという児童がいる。そんな児童に対しては、数の表す意味や、計算式を持つ意味を理解させる段階で、このような手法は有効だし、また必要であろう。

(5) 共通性や発展性のある問題・課題を提示する。

問題・課題を提示するときに、今までに学習したことが一部に含まれてはいるが、それだけではすべてを解決できないような問題・課題を提示すると児童は興味・関心を示すことが多い。また、授業を進めていくと新しい課題や疑問が生じてくるように授業を仕組むことも効果的である。児童は、未知なるものに対して、いつも興味関心を持ち続けるものである。

(6) 児童のつぶやきを拾う。

- ・児童の動きや視線の変化を見逃さない。
- ・一人の児童が発言したこと学級全員で考える場を設ける。

授業中に、教師は様々な問いかけ・働きかけを児童に対してする。即、反応して正解を答える児童もいれば、反応の乏しい児童もいる。また、自分の考えを持ちながらも自信を持って挙手・発言できない児童もいる。そのような児童も、無意識のうちに自分の思いを小さな声で吐露することがある。そんな時、「今、そのへんでいい話が聞こえたなあ、だれが言ったの?」と、児童のつぶやきを積極的に拾うようにすると、自分の考えに自信のない児童も、意見を積極的に発表できることにつながる。また、学級の児童全員が学習課題に集中している時には、児童の視線や姿勢は、黒板やプリント等のある一定の方向に向いている。逆に、学習課題に集中していない児童の視線や姿勢は、下を向いたり横を向いたりすることが多い。教師は一部の児童だけを視野に入れるのではなく、常に学級全体の児童が視野に入るような位置と意識を持つことが必要である。

◎分科会の参加者の発言から

今回の第6分科会に出席した学生たちは4人であった。どの会合でも多く発言の機会があると、参加者はより印象や記憶に残るものである。そのために、参加した学生たちに自己紹介ならぬ「他己紹介」をしてもらった。それは、学生たちが二人一組になり相手の自己紹介の話を聞いて、聞いた人がその相手のプロフィールを簡潔に紹介すること

である。教師にとって、指導したいことを明瞭簡潔に的確に教えたい対象に伝えることが求められる。そのためには、話し手や聞き手の言語は勿論のこと、態度、表情、雰囲気にも注意することが必要である。特に、発達の未熟な小学校低学年においては、伝えたい内容を、言語以外の手段で表現することも重要であると思われる。

そんな思いや、学生たちの緊張をほぐす意味合いも兼ねて、他己紹介という手法を取り入れて分科会の皮切りにした。

次に、簡単なアンケート形式で学生たちに、「今までに、やる気になったのは、どんな時ですか？」とか「今までに好感の持てる先生とは、どんな先生でしたか？」等と記入してもらいながら、それをもとにして話を進めた。自分がやる気になった時に、先生との関わりがどのようなものであったかについて話を進めていくうちに、好感の持てる教師像が浮かび上がってきた。また、好感の持てる教師像を明確にすることにより、学生が抱いている理想の教師像を具体的に思い描くことにつながったのではないだろうか。

また、別の話題では、学級内に発達障害や多動的な児童がいた場合にはどのような対応をするのですかという質問があった。それに対して、即効的な解決策はすぐに見つからないが、複数の教員で当該児童に対応したり、根気よく順序立てて児童に話を言い聞かせたりすることが大切であると答えた。更に、保護者との面談も必要になってくることもある。その場合にも、保護者に対して児童の問題行動を否定的に伝えるのではなく、できる限り児童の学校での様子や出来事の実事を客観的に伝え、「これから、A君に対してどのようなことが、担任として、親として何が私たちにできるでしょうか」と、今後の方向を保護者と共に模索していく雰囲気と契機を作ることが大切であると話をした。

第6分科会に出席した学生たちは少なかったが、明治大学出身の現役の小学校教員の滝沢と司会の井内先生の2人がいて、現場の教員ならではの具体的な発言や助言が随所であり、学生たちは真剣にメモをとったり、頷いていたりしている様子が印象に残った。

◎第6回総会・研究大会及び第6分科会を終えて

今回、この第6分科会での発表をする機会を得て、一番強く感じたことは、以前にも増して参加した学生たちの意欲・モチベーションの高さであった。かつて、私が明治大学に在学して教職課程で学んでいた頃の様子と、今の真剣に取り組んでいる学生たちと比較すると、赤面の至りである。学生時代は、これから社会に出てからの自分の人生設計に悩んだり不安を抱いたりする青年期である。かつて私も、大学4年生の時には、「教師になりたい、でも、なれるかどうかは分からない、なれないかもしれない。」と不安になったこともあった。また、「教師になったとしても、自分はやっていけるのだろうか、大丈夫だろうか？」という不安もつきまとった。きっと参加した学生たちの中にも、私がかつて抱いた同様な思いを共有している学生がいたかもしれない。もし、この分科会での私の発表やアドヴァイス、質疑応答が、そんな学生たちにとって、進路選択の一助になれば誠に幸甚に耐えない。

誠に私事で恐縮だが、かつて明治大学に在学していた昭和 50 年度に、私は別府先生から教職原理の授業を古い記念館の教室で受けた。当時、別府先生は明治大学に赴任なさったばかりで、30 歳前後ではなかっただろうか。40 年近く過ぎた現在も、その教職原理の授業の様子は未だに鮮明に覚えている。そのような恩師の別府先生のお手伝いを、明治大学教育会で私ができることを大変光栄に思っている。

また、末筆ながら、今回、この明治大学教育会第 6 回総会・研究大会の第 6 分科会で、私が発表の場を得ることができ、本稿が紀要に掲載されるのは、教職課程の別府昭郎教授や高橋靖之教授の大きな力添えや、資格課程事務長をはじめ教育会事務局の方々の多大な支援があったことを、この紙面をもって心からお礼を申し上げたい。